

北海道士別市T 地区における買い物環境づくりの取り組み 地域住民へのインタビュー調査の結果を中心に

著者	松浦 智和, 今野 聖土, 中島 泰葉, 結城 佳子
雑誌名	地域と住民 : コミュニティケア教育研究センター年報
号	5
ページ	75-77
発行年	2021-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
論文ID (NAID)	120007046145
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001889/



実践報告

北海道士別市 T 地区における買い物環境づくりの取り組み —地域住民へのインタビュー調査の結果を中心に—

松浦智和¹⁾* 今野聖士²⁾ 中島泰葉³⁾ 結城佳子³⁾

¹⁾ 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科 ²⁾ 名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

³⁾ 名寄市立大学保健福祉学部看護学科

キーワード：買い物環境 食料品アクセス問題 コミュニティ 生活満足度 生活の質 (QOL)

1. 緒言

既報の通り、筆者らは、本学と士別市の連携協定に基づき、同市の T 地区における買い物環境づくり研究事業に取り組んでおり、これまで同市と本学が共同で実施したアンケート結果について報告してきた¹⁾。そのなかでは、1) 住民の店舗出店への期待が高いこと、2) 住民が地元の店舗に期待しているのは、来客が来たときの茶菓子や調味料が足りなかったときに“ちょっとしたもの”を購入できる店舗があること、3) 課題となるのは、「品物の価格」、「利便性」、「品揃え」の何を優先し選択するのかということ、4) 出店したとしても、地域に馴染まなければ続けられず、住民にとって身近な存在の店舗にすることも課題の一つであることが示唆された。

同研究事業では、先述のアンケートのほかに、後述の住民へのインタビュー調査を実施した。本稿では、2020 年度に実施したインタビュー調査の結果について概要を報告する。

2. 調査の概要

1) 士別市 T 地区の概要

国道が地区の中心部を貫き、国道沿いを中心に市街地を形成している地域である。人口は 840 人程度、半数以上の住民が 65 歳以上の高齢者であり、また、高齢単独世帯が増えている。主な産業は「農業」である。地区には、スキー場やパークゴルフ場、森林公園、温泉施設などがあり、世代を超えて人と人とのつながりを強めることができる地域の宝物として住民から大切にされている町である¹⁾。

2) 対象および調査内容

本研究では、T 地区の住民 334 世帯を対象に、「T 地区の買い物環境についてのインタビュー調査」を実施し、171 世帯から回答を得た(回答率 51.2%)。調査内容は、「①回答者・家族の職業」「②買い物での困りごと」「③現在の買い物の持続可能性」「④同地区にあった A コープの利用状況」「⑤同地区での生活の満足度」「⑥同地区のまちづくりと若者の関わりの可能性」の 6 点である。

3) 倫理的配慮

本研究では、調査対象者に対し、士別市職員を通じて研究の概要や目的、個人情報保護に関することについて口頭・書面にて説明を行い、協力の同意を得た。また、参加の自発性について口頭にて確認した。

3. 調査結果

以下に結果を報告する。なお、詳細な結果については別稿について報告予定である。

*責任著者 E-mail:matsuura@nayoro.ac.jp

1) 回答者・家族の職業

職業では、「無職・その他」「農業」「会社員」の順に多かった。

2) 買い物での困りごと

「ちょっとしたものを買えない」「運転免許を返納したが、週1回の宅配では足りない」「バス停は目の前だが、買い物は荷物が多いのでバスは使わない」「基本は車があるため困ることはないが、調味料がなくなったときや来客があった時の出し物を買いたい際に困る」「買い物は他人に頼めない」「バスは厳しい。待っている間雪に晒されて悲しい気分になる」「買う物をすべて決めるわけではないので店に行ってから決めたい」「自分が行きたいときに行けない(家族のスケジュール)」「宅配は高く買えるものが限られている」「子どもに買ってきてもらう。こんなことでもないとなかなか会えない」などの回答が得られた。

3) 現在の買い物の持続可能性

「75歳/80歳/85歳で運転免許返納予定(あと数年)」「子どもたちがいつまで買い物を代行してくれるか次第」「冬はクルマの運転もバスに乗るのも辛い」「運転免許を返納したら(高齢者福祉施設に入る)」「自分の目で見て買い物したい」「移動販売があれば生活を続けられる」「足を悪くしたり体調を崩すともう生活ができない不安」「運転ができなくなったら引っ越す」「近所の人を誘ってくれるので乗せてもらえるうちは可能」「農業を引退したら引っ越す」「体調を崩すかクルマが壊れたらT地区での生活を諦める」などの回答が得られた。

4) 同地区にあったAコープの利用状況

「週1回/週2回くらい利用していた」「まったく利用していなかった」「全体の2割くらいをAコープで購入していた。割高だった」「食糧品以外も買っていた」「ちょっとしたものを買っていた。経営者夫妻には親切にしてもらった」「復活すれば利用したい気持ちはあるが、ほかのスーパーにはない魅力(値段・商品入れ替え)がないと。コンビニのようなものがあればよい」「菓子やパンを購入していた」「飲み物やアイスクリームをよく買っていた」「総菜やジジギスカンを買っていた」「復活してほしい。値段がもう少し低くなればもっと利用したい。もし何かできるならば、コンビニのような施設が欲しい」「店ができれば、またなくなるのは困るので、できるだけ利用したい」「もっと利用すべきだったと思っている。住民が協力しなかったのが悪かった」「品ぞろえが悪くほしいものがなかった。仕方ないのもわかっている」「仕出しなどもあってイベントの時は助かった」「地元の人が使わないと潰れるに決まっていた。後悔している」「赤字で店を閉めるならば、田舎は店がなくなってしまう」などの回答が得られた。

5) 同地区での生活満足度

「概ね満足(趣味なども含めて)」「交流がない」「近所づきあいがあってよい」「生活にはとても満足している」「持ち家なので簡単には引っ越せない」「静かで人も悪くない」「干渉しすぎない関係」「一部の人は頑張っているが、自分は何をしているのかよくわかっていない」「活気はないけど災害もない。安心で安全」「買い物するところがあれば100%満足。ないので60~70%」「新しいところへ行くのも不安。ここにいるもの不安」「人がいないなりに楽しまないダメ」「人づきあいが得意ではないので、人の輪に入れない」「パークゴルフ、俳句、そば打ち、旅行、カラオケ、老人クラブなど満足感が高い」などの回答が得られた。

6) 同地区のまちづくりと若者の関わりの可能性

「単身生活であるので近所に人とおこななければという焦りがあるがきっかけがない」「T地区の若い人も頑張っていると思う」「住民同士の助け合いで買い物にいける仕組みをつくってほしい」「ちょっと雑談するような場所がほしい」「大学生と話せるのは楽しい」「いろいろな市のサービスを削ってコンビニができるほうがよい」「外の人がやったほうがうまくいくのではないか」「地域内の人たちのまちづくりへの温度差を感じる(自分は何もしたくない、できない)」「特別なことをせず、普通に交流すればよい」「簡単に実を結ぶものではない」「地域の中には住民同士の交流を持たずに暮らしている人が結構いる」「ただ若い人が

暮らして欲していればいい」「若い世代が住むメリットが何もない」「アパートをつくったり、空き家を活用した若い世代の市街地からの移住」などの回答が得られた。

4. 終わりに

今後、本研究において検討すべき点は、1)T地区の「買い物弱者」の定義づけ、2)「これまで」はどのようなにつくられ、「これから」をどのようにつくるのか、3)買い物環境をつくるための「コミュニティづくり」とは何か、4)「脱・箱物」「費用対効果」「住民主体」時代とコミュニティづくり、5)「する自由」と「しない自由」の共存の5点に約言される。以上をベースに、買い物の具体的な場の構築、移動手段の確保、コミュニティづくりなどをデザインしていく必要がある。

文献

- 1) 北海道S市T地区における買い物環境づくりの取り組み(2020) 地域住民へのアンケート調査の結果を中心に. 地域と住民: コミュニティケア教育研究センター年報(4): 9-18.

